

学会
印象記



'95ESCRSに参加して

—戦いすんで日が暮れて—

串本リハビリテーションセンター

飽浦 淳介

'95年ESCRSは、街を縦横に走る運河とその岸辺の古い家並みが美しいオランダのアムステルダムで開かれました。私はvideo competitionに参加しましたので、まずそのことから報告します。

個人的な話になって恐縮ですが、私は去年のリスボンのESCRSから始まって今年のサンディエゴのASCRS、今回のアムステルダムでのESCRSと、このビデオ部門に挑戦してきました。ビデオ部門では優秀作品の授賞式があります。この授賞のトロフィー欲しさに、英語もあまりできない私は睡眠時間を削って、ねじりはちまきで机にかじりついて作品を作ってきたのであります。トロフィー欲しさに学会に参加するなどとは、患者を忘れた不謹慎な話ではありますが、私にとってはこれも一つの道楽なのであります。しかし発表するためにはそれ相当の勉強をしなければならず、女道楽などと違ってよほど自分や患者のためになる道楽であります。さて今回も病院を3日間休ませてもらって、日本のネパール串本から東京のネクストというビデオスタジオに出向き、暗い地下のスタジオに三日三晩とじこもりきりでビデオを作製しました。あれを直せこれを直せと言ってスタッフに嫌われながらも、手間暇と金をかけて作った汗と血の結晶のようなビデオを携えて意気揚々とオランダに乗り込んだのであります。結果は…戦いすんで日が暮れて、授賞会場からガクッと肩を落として出て行くいつもの私がそこにいたのであります。

今年のESCRSのvideo competitionでは、九州の南 宣慶先生が部門一等賞をとられました。この作品は南先生独特の切断眼球固定法とチン小帯染色法によるサイドビューで、手術中のチン小帯やカプセルの動きを効果的に映されていました。ビデオの映像およびテクニックの独創性において私の作品など足元にも及ばないものでありました。他の日本人の受賞は眼科三宅病院の太田一郎先生がposterior view（三宅ビュー）を用いたphaco手術の作品で受賞されました。グランプリはDr. Barrettの「Presbiopia, The final frontier」という作品で、まず自然界に存在する昆虫や動物がどのようにして遠方も近方もはっきり見ているのかということを示し、人間の老眼を克服する方法としてハイドロゲル製の小さなレンズを角膜実質瞳孔縁に移植して二重焦点角膜を作り出す方法を紹介していました。コンピュータグラフィックスを駆使して映像のプロ中のプロが作った作品で、金がかかっているなあ、とてもわれわれのような貧乏人はあそまでできないなあ、負けた～！という作品でありました。



ヨーロッパとアメリカのお国柄の違いでありましょうか、ESCRSはASCRSに比べ規模も半分ぐらいですが、ASCRSの戦闘的で華やかなムードとは違ってESCRSはややおとなしいムードであります。ASCRSでは屈折矯正手術の演題が白内障手術の演題より4:3ぐらいが多く、屈折矯正手術を無視してやりすごしたのではやばいと思ったものでしたが、ESCRSでは白内障のテーマのほうが圧倒的に多く(屈折矯正:白内障=1:2ぐらい)、演題もアメリカで発表したものの焼き直しといった感じでありませぬ。しかし白内障手術に関してはアメリカではphaco一辺倒といった感じですが、このESCRSに特徴的なのは、去年のリスボンのESCRSでもそうでしたが、超音波を使用しない小切開ECCEの話題が結構人気があり、招待講演でも教育コースでもよく取り上げられていたことです。この小切開(無縫合)ECCEは私の研究テーマの一つでもあり、日本でのこの分野の第一人者を勝手に自負している私は積極的にコースにも参加して、さらに見聞を深めてきたので、ちょっとここで私見を交えて報告します。小切開ECCEは大きく次の四つに分かれます。

- ①Dr. Blumentalのant. chamber maintainer systemという角膜サイドポートに挿入したやや大きめのゲージ針からボトルの灌流液による圧を常にかけてながら手術を行う方法。核はレンズグライドをすべらせて自己閉鎖創から出します-粘弾性物質が不要で安価なため開発途上国などにはいい方法です。
- ②Dr. Kansasらの核をスパーテルとフックなどで機械的に2分割または3分割する方法-核が柔らかく小さい症例にはよい方法ですが、前房中の操作が多く、やや術式が複雑。
- ③ドリルや大きな特殊なシムコ針で核を破碎吸引する方法-柔らかい核のみ可能。
- ④水流分離などで核を縮小させ粘弾性物質下に中心核を一塊としてリンピなどで出す方法(フックではさむのは私やDr. Fryの方法)-粘弾性物質が多く必要だが、日本では最も現実的で容易な方法と思われる。

この小切開・自己閉鎖創ECCEは日本ではあまり注目されていませんが、phacoの進歩と時を同時にして、この術式も進歩発展してきており、とくにヨーロッパでは多くの術者によって施行されています。phaco手術に負けないすばらしい術式ですので、phacoに行き詰まりを感じている先生や高価なphaco machineを購入できない施設ではぜひ勉強してチャレンジしてほしいと思います。この術式の情報を入手したい人は私めに気軽に相談くださいませ。

これで報告を終わります。最後に、愚かな虚栄心から海外の学会に挑戦して連戦連敗の私ですが、参加することで多くのすばらしい先生方と知り合いになりました。海外の学会に参加される先生方はそれぞれに個性的でバイタリティーにあふれ、そんな先生方の生きざまから多くのことを学ぶことができ、自分の世界を広げることができました。そのことが海外の学会に出席した一番の収穫であり私の財産であります。手前みそな話に終始してしまいました。最後まで読んでくださってありがとうございます。